

巻頭言

勘と問題意識

取締役

石川宣勝



大気環境の問題が世の中で認識され始めてから既に30年以上が経つ。

米国マスキー法あるいは国内53年規制に対し、どのような排気対策技術で対応するか、各自動車メーカーにとって文字通り暗中模索の時代があった。触媒方式なのか、マニホールドリアクタ方式なのか、エンジンモディフィケーション方式なのか、誰にも、どこのメーカーにもどれが本命なのか自信をもって言えない状況があった。このようなときに、触媒方式こそ、今後の主流とにらみ、その研究開発推進に勇気をもって判断をした先人に敬意を表したい。研究開発のテーマ決定はいつの時代でも多くの難しさをもっている。成果の大きそうなテーマを狙えばリスクも大きくなる。無難なテーマを選べば、成果も小さくなることが多い。ハイリスクハイリターンである。しかし、やはり大きなテーマを打率よく実行していくことは研究者の願望である。

その後の主流となるような大きなテーマを選択・決定するのは最終的には研究者の情熱、目の輝きとマネージャの腹をくくる度胸であろう。そしてこのとき両者にとって重要な役割を演ずるのは結局優れたセンス、勘と言ったものと思う。誰もやっていない未踏のテーマに対していくらデータを集めても、いくら計算しても最終的なGO or NOT GOの解はあるわけではない。しからばこの優れたセンス、勘を養うにはどうすればよいか、これには王道はなく、(i)日頃の問題意識、(ii)蓄積された情報量、(iii)研ぎ澄まされた感性、鑑識力、(iv)有効な経験を積むことにつぎくと思う。これらがなければ、勘は却って始末の悪い鈍刀となってしまう。

日頃の努力でこの“優れたセンス”を養っていききたいものである。“心ここにあらざれば、視れども見えず”は研究者にとっても良いことわざと思う。

